

# 月曜評論

74. 3. 25  
16頁

三週間のアジア諸国訪問の旅  
をたえ、昨日、サイゴンから  
の直航便で帰国したばかりであ  
るが、今回の旅行の感想を記さ  
うと思つて筆を執つてみる。

一つの集居がなかなか定まらな  
い。アジア諸国は、今日、それ  
ほどまでに多様であり、錯綜し  
ていて、大きく流動しているよ  
うでありながら、また、依然と  
して汪洋としているようにも思  
われる。もともと、個々の印象  
を記すには、さへいりでも可  
い。たゞそれ、南ベトナムにし  
いてみると、私は一九七〇  
年、七二年、七四年とほぼ二年  
間隔でかの地を訪れているが、  
七〇年当時ほど「色」を見ても戦  
時のままであり、街も人びと  
の表情も暗へ、埃っぽへ、さし  
てあわたたしかった。七二年の  
ときは、女子、東北方の、主と  
して山岳民族の難民キャンプを  
訪れてみて、ベトナム戦争の悲  
惨さ、この国の将来の困難をお  
らためて実感せざるを得なかつ  
た。それに比べると、今回、  
私がサイゴンで得た印象は、イ  
ンフと政治の情性にもかかわ  
らぬ、人びとの表情は明るく活  
気が充ちていて、街もきれいに  
なり、ベトナム娘のカラフルな  
アオサイ姿が美しく、ベトナム  
の直航便で帰国したばかりであ  
るが、今回の旅行の感想を記さ  
うと思つて筆を執つてみる。

## リアルなアジア認識



中嶋 嶺雄

ら、人びとの表情は明るく活  
気が充ちていて、街もきれいに  
なり、ベトナム娘のカラフルな  
アオサイ姿が美しく、ベトナム  
の直航便で帰国したばかりであ  
るが、今回の旅行の感想を記さ  
うと思つて筆を執つてみる。

が、一方、シンガポールの華字  
紙は、いまま相変わらず「日本軍  
国主義」批判の急先鋒である。  
だから、小野田さん事件につい  
ても、それをもつたら「日本軍  
国主義」の亡霊として伝えお  
り、「日本軍国主義」批判の御  
環境にかんする基礎的研究」の

は、シンガポールの中国語系の  
代表的な大学である南洋大学に  
さても「人民日報」は一部も入  
っていない。中国が「日本軍国  
主義」批判をやめてしまったこ  
とも伝わっていないのである。

とて、私の今回の旅行  
調査したのをはじめ、原住民族  
は、わが国でもようやく昭和四  
十八年度から開始された文部省  
科学研究費 特定研究による  
国際関係・国際政治にかんする  
大型の研究プロジェクト「国際  
の反政府府リラ活動の状況を調  
査できたことも大きな収穫であ  
る。

私は、アジアを見る  
とき、やれ米中接近だ、やれベ  
トナム平和だ、やれ日中国交  
正常化だ、とかくグローバルなレ  
ベルの世界認識にのみ依拠してア  
ジアを考へずすてはいないだ  
ろか。もとより、こうしたグロ  
ーバルな認識は不可欠だが、ア  
ジアの現実をそのローカルなレ  
ベルで実態的に把握することに  
よって、それぞれの国をそれぞ  
れ立体的・有機的にとらえない  
かぎり、リアルなアジア認識に  
達することはできないであ  
ろ。マレー人と中国人の複合構  
造を社会的宿命とし、中国問題  
が社会の内面にビルト・インし  
ているマレーシアにとり、た  
とえば依然として打開されてい  
ない中国との 国交樹立の問題  
は、わが国の場合とはまったく  
次元を異にする国家・民族の存  
立にかかわる問題なのである。  
このようなローカルなレベルで  
の認識をぬきにして論じられる  
アジア論議は、だから、フジヤ  
マ・ケイシヤ日本論と同根のも  
のではないだろうか。

は、シンガポールの中国語系の  
代表的な大学である南洋大学に  
さても「人民日報」は一部も入  
っていない。中国が「日本軍国  
主義」批判をやめてしまったこ  
とも伝わっていないのである。

が、一方、シンガポールの華字  
紙は、いまま相変わらず「日本軍  
国主義」批判の急先鋒である。  
だから、小野田さん事件につい  
ても、それをもつたら「日本軍  
国主義」の亡霊として伝えお  
り、「日本軍国主義」批判の御  
環境にかんする基礎的研究」の

は、シンガポールの中国語系の  
代表的な大学である南洋大学に  
さても「人民日報」は一部も入  
っていない。中国が「日本軍国  
主義」批判をやめてしまったこ  
とも伝わっていないのである。

とて、私の今回の旅行  
調査したのをはじめ、原住民族  
は、わが国でもようやく昭和四  
十八年度から開始された文部省  
科学研究費 特定研究による  
国際関係・国際政治にかんする  
大型の研究プロジェクト「国際  
の反政府府リラ活動の状況を調  
査できたことも大きな収穫であ  
る。

私は、アジアを見る  
とき、やれ米中接近だ、やれベ  
トナム平和だ、やれ日中国交  
正常化だ、とかくグローバルなレ  
ベルの世界認識にのみ依拠してア  
ジアを考へずすてはいないだ  
ろか。もとより、こうしたグロ  
ーバルな認識は不可欠だが、ア  
ジアの現実をそのローカルなレ  
ベルで実態的に把握することに  
よって、それぞれの国をそれぞ  
れ立体的・有機的にとらえない  
かぎり、リアルなアジア認識に  
達することはできないであ  
ろ。マレー人と中国人の複合構  
造を社会的宿命とし、中国問題  
が社会の内面にビルト・インし  
ているマレーシアにとり、た  
とえば依然として打開されてい  
ない中国との 国交樹立の問題  
は、わが国の場合とはまったく  
次元を異にする国家・民族の存  
立にかかわる問題なのである。  
このようなローカルなレベルで  
の認識をぬきにして論じられる  
アジア論議は、だから、フジヤ  
マ・ケイシヤ日本論と同根のも  
のではないだろうか。

は、シンガポールの中国語系の  
代表的な大学である南洋大学に  
さても「人民日報」は一部も入  
っていない。中国が「日本軍国  
主義」批判をやめてしまったこ  
とも伝わっていないのである。

(東京外語大助教授)